

卒業生、修了生の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

2022 年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

今年度においても、2020 年度から続く新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 感染拡大の影響が少なからずありましたが、対面授業やハイブリッド授業がメインとなり、全面オンラインの授業はほとんどなくなりました。これも一つの「順応」であるように思います。

教員スタッフに関しましては、岡崎敦教授(フランス中世史・アーカイブズ学・資料学)、今井宏昌准教授(ドイツ現代史)に加え、非常勤講師として学内より野々村淑子先生(教育文化史)、学外より福岡大学の森丈夫先生(アメリカ植民地時代史)をお招きしました。また、早稲田大学の中澤達哉先生(ハプスブルク帝国史)による集中講義も開講され、多様な地域・時代をカバーする授業ラインナップとなりました。

学部生に関しては、2018 年度以来、五年連続で定員一杯の学生が進学しました。尾林克幸、倉井依花、佐藤未夢、柴田光貴、乗本健、原田奈奈、松浦瞭真、村田結夢、山下桜奈、山下遼大の 10 名です。また大学院修士課程には内部進学で松本大輝が進学しました。研究室もコロナ禍前の状況に戻りつつあり、学生・院生同士の直接的な交流も活発化しています。また夏の恒例行事となっているオープンキャンパスも、昨年度、一昨年度同様、全面オンラインで開催されました。

本研究室にかかわる学会・研究会も、オンラインからハイブリッドへと形態を変えながら活発に開催されました。四月に開催された日本アーカイブズ学会では、岡崎先生が「DX時代の公文書管理：『デジタルWG 報告書』に寄せて」と題する報告をされ、また八月には岡崎先生を代表者とする科研プロジェクト「資料と公共性」の総括研究会が開催されました。また今井先生オーガナイズのもと、4 月の九州西洋史学会春季大会、ならびに 9 月の九州歴史科学研究会例会では、それぞれ「ホロコースト・空襲・公民権運動：マリオン・イングラムの経験と記憶をめぐって」、「中・東欧史から世界史を考える：「王のいる共和政」からポスト社会主義へ」と題する公開シンポジウムが開催されました。12 月には九州史学会西洋史部会が開催され、研究室OBである正本忍先生(学習院女子大学)が報告されました。

学生・院生による学術活動も、例年以上に活発でした。7 月に開催された高大連携歴史教育研究会第八回大会では、修士 2 年の高橋毅が登壇し、「教員志望の教養としての歴史学：史学科院生の経験談から」と題する報告を行いました。また 8 月には高橋、松本、そして昨年度卒業した梅田幸乃氏(福岡県立城南高等学校)が九州西洋史学会若手部会で「歴史総合」の行く末：教員志望学生と現場教員の試論」を企画しました。さらに 10 月に開催された広島史学研究会西洋史部会では、修士 2 年の松口優花が「ヴァ

イマル・ドイツにおける「同性愛者」の自己表象」と題する報告を行いました。

また今年度は、本研究室から2名の受賞者が輩出されました。まず、昨年度修士課程を修了した坂本隼人氏（佐賀県庁）の修士論文「ナチ占領下フランスにおける義勇軍組織とその経験」に対し、九州大学EU研究ディプロマプログラム二〇二一年度後期リサーチペーパー優秀賞（ヨーロッパ研究部門）が4月に授与されました。また9月には学部3年の野中諒が九州大学基金支援助成事業「山川賞」を受賞しました。

以上、簡単ながら今年度の西洋史学研究室の近況をご報告致しました。なお、今年度をもって岡崎先生が九州大学を定年退職されます。この間、岡崎先生が学生・院生と一緒に進められてきた「研究室史」の成果を、次のとおり紹介いたします。

岡崎敦・坂本隼人・平田哲也「九州大学における西洋史学教育：文学部西洋史学研究室卒業論文題目の分析から」『史淵』一五九輯（二〇二二年）八五——一七頁。

URL: <http://hdl.handle.net/2324/4772807>

岡崎先生の長年にわたる九大西洋史への貢献に敬意を表しつつ、報告を終えたいと思います。卒業生・修了生の皆様のご健勝、ならびに益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

（松本大輝）

会員近著

春田直紀ほか編／岡崎敦・城戸照子・山田雅彦ほか『歴史的世界へのアプローチ』刀水書房 二〇二一年

イタリア史研究会編／城戸照子ほか『イタリア史のフロンティア』昭和堂 二〇二二年